

# 消防団再編、イノシシ対策、子育て支援などで要望・注文

市議会主催の議会報告会・意見交換会の続報です。16日は柿崎地区公民館でした。柿崎、吉川区在住の13人のみなさんから参加していただきました。

議長による3月議会の概要報告の後、各常任委員会ごとに報告と質問が行われましたが、4つの常任委員会の報告と質疑が終わるまでに1時間近くかかり、意見交換の時間を30分延長しました。写真は委員会報告する私。

市民の皆さんからの主な発言は以下の通りです。

●消防団員が減少し、消防団再編についての検討委員会の提言がまとめられているが、議会としてどう対応しているのか鮮明にしてほしい。

●吉川区竹直と柿崎区上直海を結ぶ市道がへこんで傷んでいる。なかなか直らない。予算がないのか。

●最近、柿崎の「まちうち」でイノシシが出た。近くに児童公園があり、子どもが遊んでいた。近くの町内会長も知らないでいた。住民への連絡方法をしっかり検討すべきだ。

●保育園統合について地元地域協議会で議論している。保育園は親による園児の送迎が少なくない。定員もあるが、保育園が遠いと親の負担になる。

●子育て支援について、園児バスの無料化、おむつの無料化などもっと手厚くできないか。

●多面的機能支払交付金は5年以上になると75%に減ってしまう。市で上乗せ補助できないか。

●空き家がものすごく多くなってきた。何故取り壊しができないのか。

●上越市の学校給食米がコシヒカリから「月あかり」になるというが、「私たちは上越のコシヒカリを食べて育ちました」という意識がなくなる。委員会ですんなり議論をしたのか。

●スポーツ都市宣言しているのに補助事業が削減されてきている。これでは各区のスポーツはしぼまばかりだ。復活してほしい。

●これらは市議会広報聴取委員会で整理し、対応策を決めていきます。



## 現職教員が教育現場の実態告発

「市民アクション・上越」主催の講演会が19日、ありました。「いま、教育現場は」というテーマで、県内の私立学校の現職教員、Hさんが講演されました。

Hさんは、「少ない学校が0時限、7限の授業を行っている。ひどい学校は8時間目、9時間目もある」「子どもたちも大人も学校も生き残りをかけて競争に追いつてられている。私立学校は企業化され、サービス業化されている」と学校の実態を明らかにしました。

そして、なぜこうなったかをHさんは戦後の教育の歴史を振り返りながら説明しました。「学習指導要領の改訂が学習内容だけでなく、『資質・能力』『指導方法』『評価』にまで踏み込むことにつながった」など教育基本法の「改正」が果たした役割がよくわかりました。やはり、改悪前

に予想した通りの展開となっていますね。

最後にHさんは、「現場から新しい教育、社会を切り拓く」ためにということで、「教職員組合を立て直し、民主的な職場づくりを進めていく。授業づくり、学級づくりをしていく。生徒、卒業生、保護者、同僚などつながっていく」ことを重視していくと話されました。



【ムベ】アケビ科ムベ属の常緑つる性木本植物。漢字で「郁子」と書きます。昨年秋にこの実と出合ってから、一度、花を見てみたいと思っていました。同じアケビ科でも雰囲気は全然違いますね。5月11日、吉川区山直海にて撮影。

# はしづめ法一の活動レポート

No.1910 2019.5.26

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪のりかず  
Tel 025-548-3628

通じないときは 090-5392-1961

E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp

URL <http://www.hose1.jp/>



ブログ  
「ホーセの見  
てある記」は  
← こちら

橋爪法一

検索

# 春よ来い

## 第五五八回

## 命のつながり

このところ、命について考える機会が続いています。

例えば五月五日、私は大島区で従兄の納骨式に参列していました。ここでも命について考える機会を与えてもらいました。

この日、仏壇の前でお経を上げてくださった吉川区の専徳寺住職の松村公雄さんは、「亡くなった日のことを『死亡年月日』と呼ばず、なぜ『命日』と呼ぶのでしょうか」と私たちに問いかけられました。そして、少し時間を置いて、「命日とは命のバトンを渡す日」とおっしゃったのです。

松村さんからは、だいぶ前にも「命のバトン」という話を聞いていたこともあって、この日は、松村さんのこの言葉がずっと頭に残っていて、命日や法事のことを考える素地はできていました。

この日、「庄屋の家」で行われたお斎の席では出席者の一人からたいへん興味深い話を聴きました。

話を聴かせてくれたのはKさん。亡くなった従兄の母親と同じく、Kさんの母親も大島区竹平の「むじつ」（屋号）の出身でした。Kさんは、かなり前に角間から柿崎区上下浜に移住しています。

Kさんは、自分が子どもの頃、母親の実家へ泊まりに行ったときのことについてふれ、「浅五郎さんというじいさんはじつに達筆だった。それと布団の中で昔話をしてくれた」と語りました。またKさんは、自分の母親が若い頃、東京は神田神保町の「大運堂」という古本屋に奉公に出ていることについても語ってくれました。

話を聴きながら、私は浅五郎さんからKさんの母親、さらにKさんへとつながっているものがあるなと感じました。

そして今月十二日、直江津の三八市の通

りに面した聴心寺の掲示板上書かれた言葉。これがまた、すばらしいものでした。

花は散っても

花は死なない

翌年また花は咲く

人は死んでも

なくならない

縁あった人の心に

生き続ける

縦七〇センチ、横一〇二センチほどの掲示板上、一字一字丁寧に書かれています。

書いたのは同寺の住職だった居多徳恵さんです。徳恵さんは五月六日、満六四歳で亡くなられたのですが、亡くなる前日か前々日に掲示板にこの言葉を書かれたというのです。まるで、「自分が死んでも悲しむことはないよ」と遺言を書かれたかのようで、徳恵さんのことを知っている人はみんなびっくりしました。

私はここ数年、同寺の掲示版を見続けてきました。徳恵さんが自分で言葉を考え、しかも自筆で書いておられたことは十分承知していたのですが、それでも、ひよっとすれば、掲示板を書いていたのは坊守さんかもしれないと思ったりしています。

私は、フェイスブックや毎週発行の活動レポートなどでこの掲示板の言葉を紹介しました。それを読んだ多くのさんから、「ご住職のお人柄が伝わってくる掲示板、最後に素晴らしい大事にしたい言葉を残された」「身近なものが亡くなって悲しい思いをしていたが、これで元気に生きていけます」などの声が寄せられました。

Kさんの話といい、聴心寺の掲示版といい、私の心に響きました。そして、思ったのです。「人の命はつながっていく。自分が死んでも、『人の心に生き続ける』生き方をしなければ」と。

## 話題の「うち越さくら」と懇談

7月の政治戦で注目されている弁護士、「うち越さくら」さんが21日、国民民主党の梅谷守県連代表とともに党上越地区委員会に挨拶に来られ、懇談しました。

懇談会場となった2階の会議場には、仲間たちが「うち越さくら」さんを歓迎する言葉をガラス戸に貼ってつけていました。

挨拶が終わってからの懇談の中では、「うち越さくら」さんが弁護士になったいきさつや、若者への思いなどを問う質問も出されました。私からは、「上越市は北の植生と南の植生が重なっていて、私が住んでいるところはササユリの北限となっている。野菜の種類も豊富だ。農業の多面的な発展のためにも頑張ってもらいたい」と訴えました。

私はこの日のためにずっと考えていたことがありました。ニセアカシアの花を「うち越さくら」さんにプレゼントすることです。甘



い香りをぜひ味わってほしいと思っていましたし、それにこの花の花言葉が好きだったからです。花言葉は、「頼られる人」です。さくらさんには、この花、気に入ってもらえたようです。

## ニュースフラッシュ

### 上越地域各消防署における空間放射線量測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	5月15日(水)	5月22日(火)
上越南消防署	0.043	0.047
上越北消防署	0.050	0.043
新井消防署	0.040	0.047
頸北消防署	0.057	0.047
頸南消防署	0.060	0.063
東頸消防署	0.043	0.050
高士分遣所	0.047	0.040
名立分遣所	0.050	0.047

# 春よ来い

## 第五五八回

## 命のつながり

このところ、命について考える機会が続いています。

例えば五月五日、私は大島区で従兄の納骨式に参列していました。ここでも命について考える機会を与えてもらいました。

この日、仏壇の前でお経を上げてくださった吉川区の専徳寺住職の松村公雄さんは、「亡くなった日のことを『死亡年月日』と呼ばず、なぜ『命日』と呼ぶのでしょうか」と私たちに問いかけられました。そして、少し時間を置いて、「命日とは命のバトンを渡す日」とおっしゃったのです。

松村さんからは、だいぶ前にも「命のバトン」という話を聞いていたこともあって、この日は、松村さんのこの言葉がずっと頭に残っていて、命日や法事のことを考える素地はできていました。

この日、「庄屋の家」で行われたお斎の席では出席者の一人からたいへん興味深い話を聴きました。

話を聴かせてくれたのはKさん。亡くなった従兄の母親と同じく、Kさんの母親も大島区竹平の「むじろ」（屋号）の出身でした。Kさんは、かなり前に角間から柿崎区上下浜に移住しています。

Kさんは、自分が子どもの頃、母親の実家へ泊まりに行ったときのことについてふれ、「浅五郎さんというじいさんはじつに達筆だった。それと布団の中で昔話をしてくれた」と語りました。またKさんは、自分の母親が若い頃、東京は神田神保町の「大運堂」という古本屋に奉公に出ていることについても語ってくれました。

話を聴きながら、私は浅五郎さんからKさんの母親、さらにKさんへとつながっているものがあるなと感じました。

そして今月十二日、直江津の三八市の通

りに面した聴心寺の掲示板上書かれた言葉。これがまた、すばらしいものでした。

花は散っても

花は死なない

翌年また花は咲く

人は死んでも

なくならない

縁あった人の心に

生き続ける

縦七〇センチ、横一〇二センチほどの掲示板上、一字一字丁寧に書かれています。

書いたのは同寺の住職だった居多徳恵さんです。徳恵さんは五月六日、満六四歳で亡くなられたのですが、亡くなる前日か前々日に掲示板にこの言葉を書かれたというのです。まるで、「自分が死んでも悲しむことはないよ」と遺言を書かれたかのようで、徳恵さんのことを知っている人はみんなびっくりしました。

私はここ数年、同寺の掲示版を見続けてきました。徳恵さんが自分で言葉を考え、しかも自筆で書いておられたことは十分承知していたのですが、それでも、ひよっとすれば、掲示板を書いていたのは坊守さんかもしれないと思ったりしています。

私は、フェイスブックや毎週発行の活動レポートなどでこの掲示板の言葉を紹介しました。それを讀んだ多くのことから、「ご住職のお人柄が伝わってくる掲示板、最後に素晴らしい大事にしたい言葉を残された」「身近なものが亡くなって悲しい思いをしていたが、これで元気に生きていけます」などの声が寄せられました。

Kさんの話といい、聴心寺の掲示版といい、私の心に響きました。そして、思ったのです。「人の命はつながっていく。自分が死んでも、『人の心に生き続ける』生き方をしなければ」と。

## 市内名家一斉公開され、賑わう

19日、市内一斉に名家が公開されました。私はこのうち、大島区の飯田邸と戸野目の保坂邸を訪れました。

飯田邸は吉川区ともかかわりが深く、何度も訪れています。今回はコーヒーをいただきながら、保存会のみなさんと話をしました。飯田邸の紹介パンフレットは日本語版の他、英語版、中国語版まで用意されていました。床の間に飾ってあった生け花が私の知っているHさんの作品だとはびっくりでした。野の花好きの人ですが、素敵な作品でした。

保坂邸は前から一度訪ねてみたいと思っていましたが、なかなか実現せず、初めて入りました。豪農の館とはいえ、造りは思っていた以上にコンパクトでした。でも、何と言った方がいいのでしょうか、落ち着いていて、しゃれた雰囲気のある空間、素敵でした。

いくつかの建物の中で一番惹か



れたのは蔵です。270年前のものということですが、いまは高級喫茶店風の空間となっていました。柱時計、ラジオ、人形など写真におさめました。

## ニュースフラッシュ

### 上越地域各消防署における空間放射線量測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	5月15日(水)	5月22日(火)
上越南消防署	0.043	0.047
上越北消防署	0.050	0.043
新井消防署	0.040	0.047
頸北消防署	0.057	0.047
頸南消防署	0.060	0.063
東頸消防署	0.043	0.050
高士分遣所	0.047	0.040
名立分遣所	0.050	0.047